

<招待寄稿>

## 日本国際学園大学 紀要発行に寄せて

日本国際学園大学学長 橋本 綱夫

19回の号を重ねた筑波学院大学の紀要を引き継ぎ、日本国際学園大学紀要が発行されることを心から嬉しく思います。

この間、日本社会は大きく変化をいたしました。特に、少子高齢化が大きく進展しています。人口はやや減少しつつも、大幅に減少しているわけではありません。大きな変化は、年齢構成にあります。2005年には、65歳以上の高齢者人口は約2500万人、人口比約20%でした。2023年には、高齢者人口は3600万人を超え、人口比約29%に達しました。その一方、生産年齢人口は2005年には約8400万人でしたが、2023年には約7400万人となりました。

今後も、高齢者人口比率は上昇を続け、生産者人口は減少し続けます。より少ない生産者が高齢者を支える将来になることは、前々から言われておりましたが、現実となりました。

生産者世代にとって、負担は少ないほうが良いですし、高齢者世代にとって、年金等の保証が多いほうが良いのは当然です。しかし、少子高齢化が進展するほど、生産者の負担は大きくなり、高齢者各人への分配は急速に減少せざるを得ません。私たちは、この未来を薄々予測していますが、受け入れ、対応する準備をできているとは言えません。

この11月衆院員選挙で躍進した国民民主党の目玉公約は手取りを増やす、ということにありました。これは、まさにこのような現実へ、

生産者世代の反発の気持ちや、国民民主党への投票に動いた結果と言えるのではないのでしょうか。

解決の方策は、労働生産性を著しく高めること以外には、ありません。日本はすでにサービス産業中心の社会になっていますが、サービス産業の労働生産性が低いことが長年指摘されてきました。そして、少子高齢化社会で不可欠なのは、多数の高齢者が生活する地域社会の生活を支えるサービス産業です。そもそも、労働者が全く足りない中、サービス産業の労働生産性を高め、待遇を高めなければサービス産業が成り立たず、地域社会が崩壊してしまいます。とにかく、サービス産業の労働生産性を高め、サービスを維持向上し、サービス従事者の待遇を高めるしかありません。そこで、キーとなるのが、生成AIをはじめとするAI技術です。これから、サービス業の現場にどれだけAI技術を落とし込み、生産性を高めていけるかに、日本社会の将来、そして、国民の幸せがかかっています。

このような持続的な社会の発展を根本から支える重要なファクターが、多くの研究者による地道な研究活動です。教員の研究活動は、直接間接により良き社会形成につながっています。新たな日本国際学園大学において、より研究活動が活発に行われ、そして、本紀要がその発表の場として活用されることを大いに願っております。